

---

# 不思議な国にアリス～A sound of the darkness～

f g n c e + RA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議な国にアリス／A sound of the dark  
ness

### 【ZPDF】

Z0216D

### 【作者名】

f g n c e + R A

### 【あらすじ】

日曜日の午後、姉さんは絵本を読み聞かせようとする。いつもの事だ。確か、その絵本の名前は…不思議の国のアリス。

本の図リスト（複数用）

## 本の国にアリス

止まらない自分の胸の鼓動が遠くから聞こえてこるような不思議な感覚に襲われた。

### 本の国

#### にアリス

「アリス。絵本読んあげるわ。」

小春日和とでもいおうか。今現在の日和を示すような日の、のんびりとした姉の思考回路はどうも苦手だ。面倒くさい上に面倒くさい。日曜日ということで、久々に姉と一緒にきりで庭で寛ぐというこの状況は…

まあいい。

が、さつきから姉に

「ねえ。読んあげるから。ねえ。ねえったら。」

と、絵本を聽かされることを必要に迫られるという状況は遠慮しておきたい。しかし、それがわたしたちの日曜日。

「その絵本、庭で寛ぐたびに聞かされてるんですけど。」

「だって、主人公の名前なんかアリスとお揃いなのよー? これってとっても珍しいことよ。なんども話したくなるじゃない! ! !」

「その理由も何度も聞かされてますし、何度も言いますけど、わたしの名前はその絵本から姉さんがとつてわたしにつけたんでしょう。

」

「この勘違いしてほしくないのが、わたしは姉が嫌いなわけじゃない。どちらかといえば好きだし、家族として大事に思つていい。…ただ、苦手なだけだ。

「この絵本の原作には主人公のお姉さんや、妹も出でてくるのよ。ほらね。アリスにぴったりじゃない…！」  
ほう。その話は初耳だ。

しかし、ほらねと言われても。

「姉の日和にあてられてると、睡魔が襲つてくる。普段の忙しさが嘘のようなこののんびりさ加減。それでも、毎度言ひ返すわたしは我ながらに偉いと思う。

姉としては、いちいち言われ、いちいち言い返すのが好きなようだ。因みに何度も聞いてるとは言つてもまともに聞いたことはない。必ず話の途中で眠つてしまつからである。

「…！何なの…！もつ…また…その口の利き方は…！」

このセリフも何度か聞いたことがある。だが、絵本を読み聴かせる場で言われたことはなかつたように…思う。

「…いいぢやないですか、敬語ぐらい。」大きな欠伸をしつつ答えた。

最初に言われたときは失礼な言葉遣いをしてしまつたかと、驚いたが、むしろその丁寧な言葉が姉の感情を怒りに導いてしまつたらしい。今はそのときに比べるとかなりラフな口調、態度になつてゐるはずだが、まだ不満があるようだ。…それにしたつて怒り過ぎだ。  
まだ、なんか言つている…。ああ、もう無理だ。そこでわたしの思考は途切れた。

\* \* \* \* \*

…ん？

おまみづ。やひしたの？

わたしに……わたしに姉などいたかしきりっ。

いないよ。

では何故？

夢だから。

ああ、そう。……ん？あなたは……？

また忘れたの？

ああ、花、ね。

そう。花。でも忘れてたんだね。酷い。

うめん。

いいよ。許してあげる。その代わりにあなたを……い。

え？「めん。もう一回呑つて？

…あなたの命をちようついだい。

え…？

\* \* \* \* \*



## 本の国にマリス（後書き）

初めての投稿です。力不足ですが、生温かい目で見守つて頂けると幸いです。

## 図の国リスト（複数）

龜筆で申し訳あつません。  
ねむりく毎度こんな感じです。

## 闇の国にアリス

その闇は深く、深く、脆かつた。

### 闇の国

にアリス

「つ……」

どうやら自分は眠ってしまっていたらしい。

夢を見ていたので浅い眠りだったようだが、周りを見渡しても姉の姿はない。

何かあつたのだろうか。

姉の話で眠つてしまふことは今まで何度があつたが、起きると必ず姉が側にいて、よく眠れた?と微笑んでくれていた。

そしてまた騒ぎ立てる。不器用な姉の精一杯の優しさ。

「……のんびりしてると曜の午後か……」

状況を呴いてみる。

姉がわたしのために騒いでくれていたことが分かったとき、申し訳なくて、だからこそ一緒に楽しそうにするのが正しさだと思つた。

わたしは騒がれるのが苦手な妹。それでいい。

こんなのがんばりした午後は久しぶりだ。姉がいつもいつも騒ぎ立てていたから。

苦手だけどこうなると寂しくも感じられてくる。そういう関係でい

られる。

それはとても幸せなこと。

改めて考えると…なんか…。

「…はあつ…はあ…つ…はあ…時間が…！」

ぽーっと考え方をしていると、田の前を何かが横切った。

「…つ！？」

田で追いかけようと見知らぬお兄さんが忙しそうにわたしの家の庭を通り過ぎていく。

…寛大なわたしはその光景を見逃すことにした。

どうしても急いでいるときは人の庭でも通り過ぎたくなるものだ。非常識極まりないので、わたしはそんなことしないが。

気持ちは分かる。

それにお兄さんはもう大人だ。悪いと分かっていてやっているのだろう。

それこそ問題かもしれないが、申し訳ないと思つていてるけれどもつ…どうしても時間がないのでお邪魔いたします…。すいません…。位の気持ちは持ち合わせてているのだろう。

見たところそんな気配が察せられなくもない。

そんなところを住人に偶然見られてしまい、咎められるのはわたしも嫌だ。じついうときはお互い様だ。ここは見過<sup>ご</sup>してやろう。というか面倒くさいのだ。

「…ちつ…。」

ドガシャアアン

前言撤回。

こんなヤツからそんな気配が察せられるはずがない。それが申し訳なく思う家への態度か。

わたしが黙つて通り過ぎるのを見ていると、急に彼が庭に悪趣味にも飾つてあつた骨董品を蹴飛ばした。割れた。

あまりにも衝撃的な展開だ。いい年頃の大人な見た目に、反する非常識さ。いくら用事だかなんだか知らないが、時間に間に合いそう

にないからといって、ひとんちに無断で入った上に、いかにもなよう

に置いてあつた骨董品を蹴り飛ばすとはどういう神経しているん

だ。たとえ悪趣味だとしても。…うん。

目の前の光景が信じられない。

…それでもどうしても咎める気になれなかつた。

子供のわたしが怒鳴つたところ（あの性格の）彼は見向きもしないだらうし、なにより…面倒くさい。

…。

「…？」

…。

改めて見ると、彼はわたしの見える範囲で立ち止まつていた。まだ暴れる気だらうか。どうでもいいが、わたしの前で暴れられると、後々注意しなかつた罪悪感に苛まれることになる。

…昔のわたしならこの庭に入つてている時点で叱つていただろつ。

これは進歩なのか…退化なのか…。

「…ふう…。」

「…！」

「…！」

「…？」

何故だらうか。彼は急に驚いた顔をして振り向き、わたしの方にズカズカ歩いてきた。

…キレイに整えられた花壇を踏みながら。

「お前は…つ…お前…溜息つく位ならなんぞさうかと注意しない！？」

何を考えているんだ！！！

いくら用事だかなんだか知らないが、時間に間に合ひそうにないからといって、見知らぬウサギ耳男がひとんちに無断で入つた上に、いかにもなように置いてあつた骨董品を蹴り飛ばすとはどういう神経しているんだ。とか思わないのか！？

「…く…」

まるで心を読まれたかと思われる程の完璧なセリフ。まさしく、先

程思つていたことだ。

…あれ。わたし…なんでこんなに冷静なんだろ。

見知らぬ男が（中略）してきた、またさらに上に、こちらが怒鳴るべきものを急に怒鳴られたあげくのお前呼ばわり。

…あまりにも衝撃的過ぎると人間つて意外と冷静でいられるものなのね。

「そんなのはお前だけだつ……おまけにお前呼ばわりで怒鳴り散らされてるんだぞ！？」

あ、思つていたことがどうやら口に出していたらしい。

仕方がないので立ち上がり答える。

「…そう思うならやらなければよろしいのではないでしょうか…」

「はあ？！…ああつ…もうつ…なんだその言葉遣いつ……ひとつでもいいつ…敬語はいらん…！」

「え…？あー、うん。」

誰かさんにもよく言われることだ。見ず知らずの人には（たとえ非常識人間だとしても）いきなりラフな口調はどうかと思ったが、反論するのも面倒くさいので頷いておく。

「俺は…「あれ？ウサ耳？」

彼には人間にあるべき部分がなく、代わりに頭の上にあるそれらしきものがピクピクと動いていた。

「…！…ちつき話しただりつ……しかもじつでもいいつ……！…時間がないというのに…つ…！」

ズコンツ

ウサ耳のお兄さんに一方的に怒鳴られていると、今まで聞いたことのないような衝撃的な音が響いた。何が起こったというのだろうか。

先程までわたしがいた場所には…弾丸らしきモノ。

…どうやら、ウサ耳のお兄さんがわたしを抱えて動いてくれなければ…。

しかし、ウサ耳のお兄さんがわたしを抱えて動かないでいてくれたから…。

穴なんかに落ちなかつたのに。

「へつ……？」

「クソッ……！」

待つて……まだ死にたくない……のに……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0216d/>

---

不思議な国にアリス～A sound of the darkness～

2010年10月9日23時28分発行